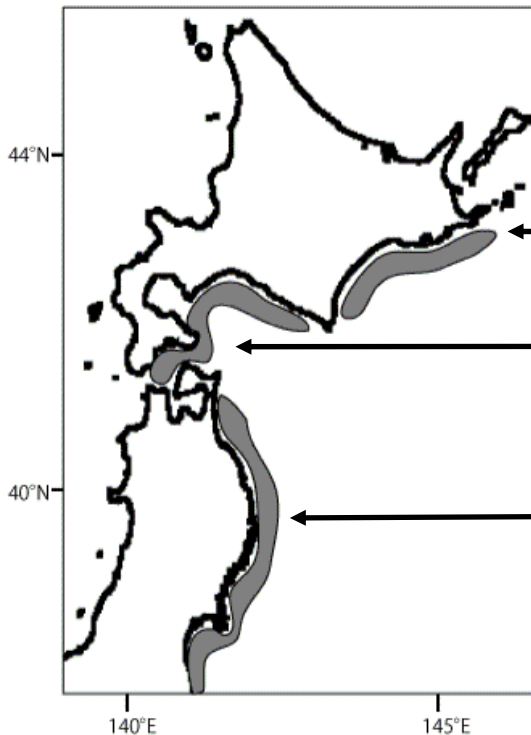


平成22年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2010年7月～9月)のポイント

常磐～道東太平洋の北部太平洋海域におけるスルメイカの
来遊水準は全体としては前年を下回る。



道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並みか小さい。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 香川、今井

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成22年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2010年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：冬季発生系群（2010年級群）。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体：前年並みか小さい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体：前年より小さい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底曳網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：前年より遅い。
- (3) 魚体：前年より小さい。

漁況の経過（2010年5月～6月）および今後の見通しについての説明

(1) 資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970年～1980年代は低位水準で推移した。1989年から増加に転じ、それ以降では1996年（年間漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった（図1）。近年は高位から中位水準で推移しており、直近3年の漁獲量は、2007年に大きく増加したが（144千トン）、2008年と2009年は109千～117千トンと横ばいであった。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区別される。2009年7月～9月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は53千トンであり、常磐～三陸海域では36千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では12千トン、道東太平洋海域では5千トンであった（図2）。なお、近年の漁獲量のピークは9月～11月である。

(2) 関連調査結果

第1次漁場一斉調査

6月上旬～7月上旬に実施された第1次漁場一斉調査（釣り）の結果（図3）、全水域の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.41尾であり、2009年（1.09尾）を下回り、2004年以降の平均水準（1.03尾）も下回った。

三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）では0.25尾であり、2009年（0.28尾）並みであった。津軽海峡～道南太平洋海域（41°N以北、143°E以西）では0.05尾であり、2009年（6.06尾）を下回った。

沖合域（143°E以东）では0.51尾であり、2009年（0.85尾）を下回った。

その他関連調査

・新規加入量調査結果：5月下旬～6月上旬に常磐～三陸周辺海域および沖合域で実施された表中層トロールネットを用いた漁獲試験の結果（図4）、外套背長5cm以上8cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は605.7尾であり、2009年（106.0尾）を上回った。さらに、予測期間に漁場への加入が見込まれる外套背長8cm以上の大型個体の平均漁獲尾数も106.0尾であり、2009年（41.3尾）を上回った。ただし、本年の調査は前年と比べて約3週間遅く実施されているため、過去の調査結果との比較は困難であり、参考のために調査結果を掲載するに留めた。

・日本海における一斉調査結果：日本海で6月下旬～7月上旬に実施された一斉調査において、津軽海峡西口周辺海域（39～42°N、138～140°E）における平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は10.6尾であり、2009年（11.5尾）並みであった。

・岩手県沿岸域における漁獲試験結果：6月下旬に岩手県沿岸域で実施された釣り調査（岩手県）によると、2010年の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.4尾であり、2009年（9.7尾）を下回った。

(3) 2010年の各海域の漁況経過（5月～6月）

・2010年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量（生鮮：各道県の速報値等、一部未集計）は5.6千トンで、前年（2009年5月～6月、8.1千トン）を下回った。三陸海域南部～常磐海域での6月の主要港水揚げ量は4.8千トンで前年（3.6千トン）を上回ったものの、三陸海域北部では0.6千トンに留まった（前年の20%）。さらに津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は0.1千トンで、前年の0.7千トンを下回った。なお、表1に各地域での漁況経過を示した。

(4) 魚体の大きさ

・6月～7月上旬に実施された漁場一斉調査（釣り）で漁獲されたスルメイカの全調査点での外套背長組成は、モードが13cmにある単峰型の組成であり、2009年（18cm）より5cm小さかった。海域別にみると、三陸周辺海域でのモードは16cmと21cm（2009年：15cm）、津軽海峡海域では9cm（2009年：18cm）、沖合域では13cm（2009年：18cm）であった（図5）。

・6月に三陸沿岸で漁獲されたスルメイカは、底曳網では前年よりも大型個体の比率が高かった。一方、定置網では前年並みか小さく、釣りでは前年より小さかった（表1）。

(5) 今後の見通しの説明

・7月上旬現在の本予報対象海域である北部太平洋海域における漁獲対象資源は、本年6月までの各地の漁獲状況から判断すると、概ね2009年を下回る水準であると推測される。6月の漁場一斉調査の平均CPUEは、全水域で前年を下回った。以上のことから本予測期間である7月～9月の来遊水準は、全体としては前年を下回ると予想される。

・常磐～三陸海域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体に、津軽海峡から加入する日本海由来の群が加わると考えられている。三陸周辺海域における漁場一斉調査でのCPUEは2009年並み、岩手県沿岸域の釣り調査でのCPUEは前年を下回った。6月に漁獲量の大部分を占めた三陸海域南部～常磐海域での底曳網による水揚げ量は、前年を上回ったものの魚体は大きく、これらは当海域から早期に移動する可能性がある。その他の漁獲状況および小型イカ釣り漁業でのCPUE（1日1隻当たり漁獲量）は2009年を下回ることから、太平洋沿岸域を北上する群は概ね2009年を下回ると判断される。一方、津軽海峡から加入する群の来遊水準は、2009年を下回ると推測される（後述）。以上のことから常磐～三陸海域の来遊水準は前年を下回ると推察される。魚体は、漁場一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年（8月、モード21cm～22cm、9月、23cm）並みか、より小型の個体が主体になると考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲対象資源は、津軽海峡から加入する日本海由来の群と太平洋沿岸を北上する群である。津軽海峡西口周辺海域での調査船によるCPUEは前年並みであったが、津軽海峡内では7月上旬現在、小型イカ釣り漁業の漁場は形成されていないことから、津軽海峡への来遊水準は前年並みか下回ると推察される。津軽海峡東口周辺海域での調査船によるCPUEおよび小型イカ釣り漁業でのCPUE（大畑港）は前年を下回ったことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域への来遊水準は前年を下回ると推察される。また前述の

とおり、太平洋を北上する群も、前年を下回ると推察される。以上のことから津軽海峡～道南太平洋海域への来遊水準は前年を下回ると予測される。魚体は、漁場一斉調査および漁獲物の測定結果から、前年（8月、20cm、9月、22cm）よりも小型の個体が主体になると考えられる。

・道東太平洋～根室海峡周辺海域に来遊する漁獲対象資源は、沖合域を北上する群と考えられている。漁場一斉調査における沖合域でのCPUEが前年を下回ったことから、道東太平洋海域に分布するスルメイカの資源水準は2009年を下回ると推測される。また、水産総合研究センターの海況予報モデル（FRA-JCOPE）の予測結果によると、本年は道東沖合域の北上暖水の張り出しが前年よりも弱勢と予想されるため、道東沿岸域への北上回遊時期は前年よりも遅くなると推測される。以上のことから、7月～9月における来遊水準は前年を下回ると予測される。魚体は、漁場一斉調査の結果から、前年（8月、20cm、9月、22cm）より小型の個体が主体になると推測される。なお根室海峡～オホーツク海への来遊時期は、例年通り10月以降になると推測される。

表1. 漁況経過（2010年5月～6月、一部未集計）

	漁況経過
北海道 道東	道東太平洋近海での釣りによる水揚げは7月8日時点では、まだ見られていない（2009年は釧路港が8月10日）。
北海道 道南	6月における函館港水揚げの釣り漁獲量（116トン）は、2009年（133トン）並み、CPUEは前年比88%であった。なお、7月上旬現在、主漁場は松前沖である。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は、5トン（前年比4%）であった。CPUEは前年比63%であった。八戸港および大畑港の釣りによる水揚げはなかった（前年はそれぞれ51トン、0.6トン）。八戸港では7月2日に初水揚げがあった（前年よりも約3週間遅い）。
岩手	6月の主要7港における水揚げは、底曳網による漁獲量が1トン（前年比2%）、定置網による漁獲量が212トン（前年比43%）であった。釣りによる漁獲量（25トン）は、2009年（79トン）を下回ったものの、CPUEは前年比148%に増加した。定置網で漁獲されたスルメイカのモードは16cmモードであり、前年（16cm、22cm）よりも小型の比率が高かった。
宮城	6月の主要10港における水揚げは、底曳網による漁獲量が4,255トン（前年比149%）、定置網による漁獲量が212トン（前年比46%）であった。釣りによる漁獲量（10トン）は、2009年（147トン）を下回り、CPUEも前年比63%であった。底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは21cmで、前年（18cmと21cm）より大型の比率が高かった。
福島	6月の全漁港における水揚げは、沖合底曳網による漁獲量が69トン（前年比74%）、小型底曳網による漁獲量が6トン（前年比73%）であった。CPUEもそれぞれ前年比73%、77%へと減少した。釣りによる漁獲は無かった。沖合底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは20cmであった。
茨城	6月の主要港における水揚げは、沖合底曳網による漁獲量が7.1トン（前年比571%）、小型底曳網による漁獲量は8.3トン（前年比227%）であった。CPUEはそれぞれ前年比366%、294%に増加した。

表1. 続き

千葉	5月の主要港における水揚げは、定置網による漁獲量（3トン）が、2009年（6トン）を下回った。6月から沿岸域での釣りによる漁獲が増加している。
神奈川	5月～6月の主要2港における水揚げは、定置網による漁獲量が1.1トン（前年比69%）、釣りによる漁獲量が1.1トン（前年比129%）であった。
静岡	5月～6月の主要港における水揚げは、釣りによる漁獲量（11トン）が、2009年（30トン）を下回り、CPUEも前年比61%に減少した。
三重	5月～6月の主要港における水揚げは、中型まき網による漁獲量（156トン）が、2009年（93トン）を上回った。
和歌山	5月～6月の主要2港における水揚げは、釣りによる漁獲量（0.03トン）が、2009年（13トン）を下回った。魚体は小さい。
高知	5月～6月の主要3港における水揚げは、釣りによる漁獲量（3トン）が、2009年（6トン）を下回った。CPUEは前年比56%であった。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

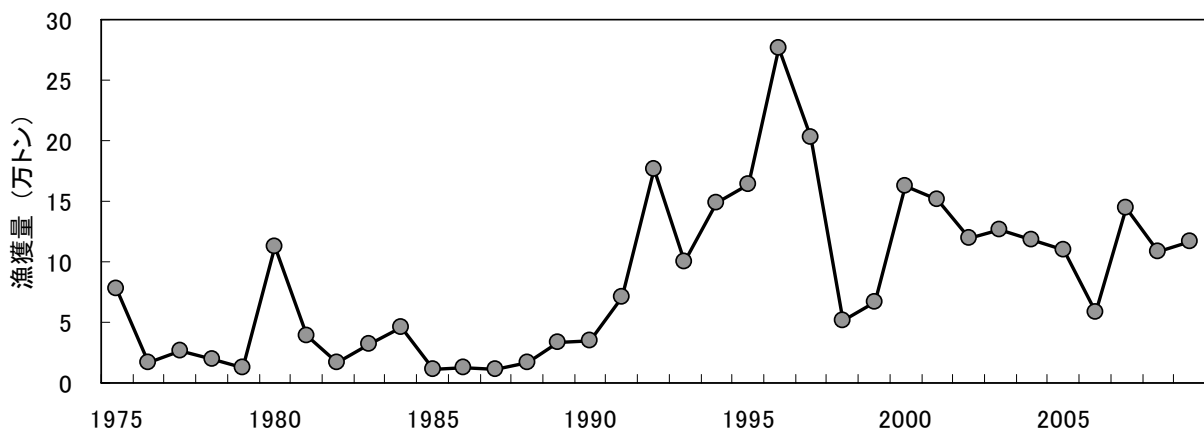


図1. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

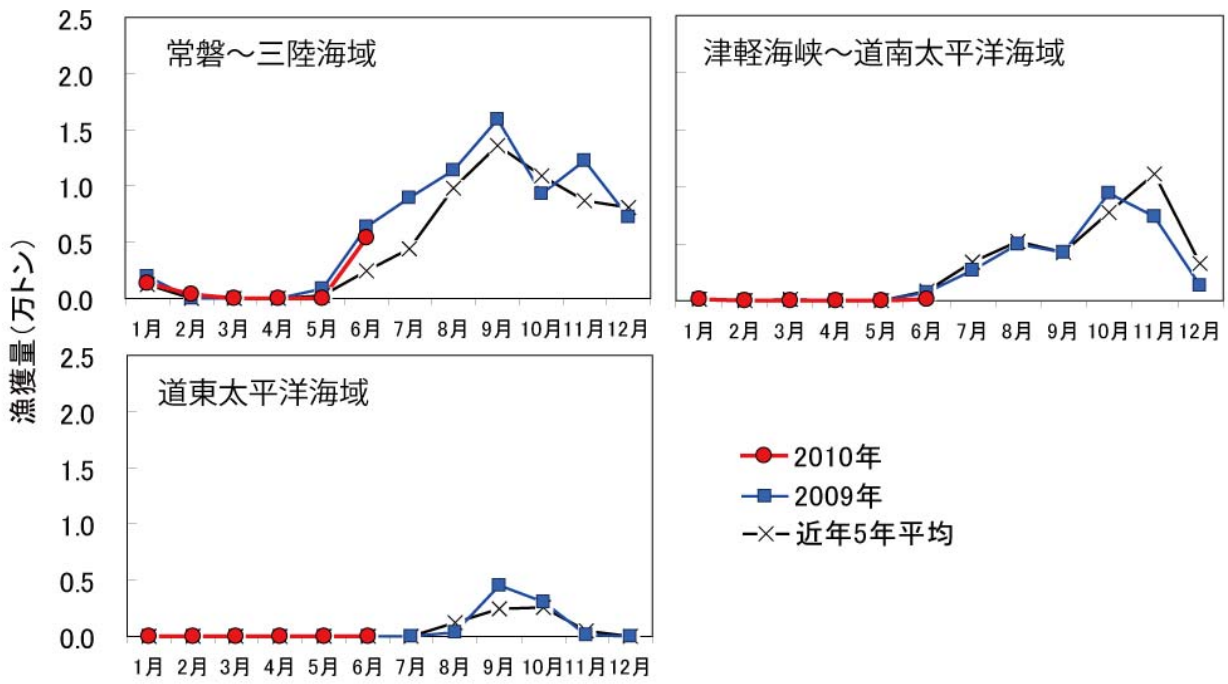


図2. スルメイカ月別海域別漁獲量（生鮮）

近年5年は2005年～2009年

（釣り・定置網・底曳網・まき網）

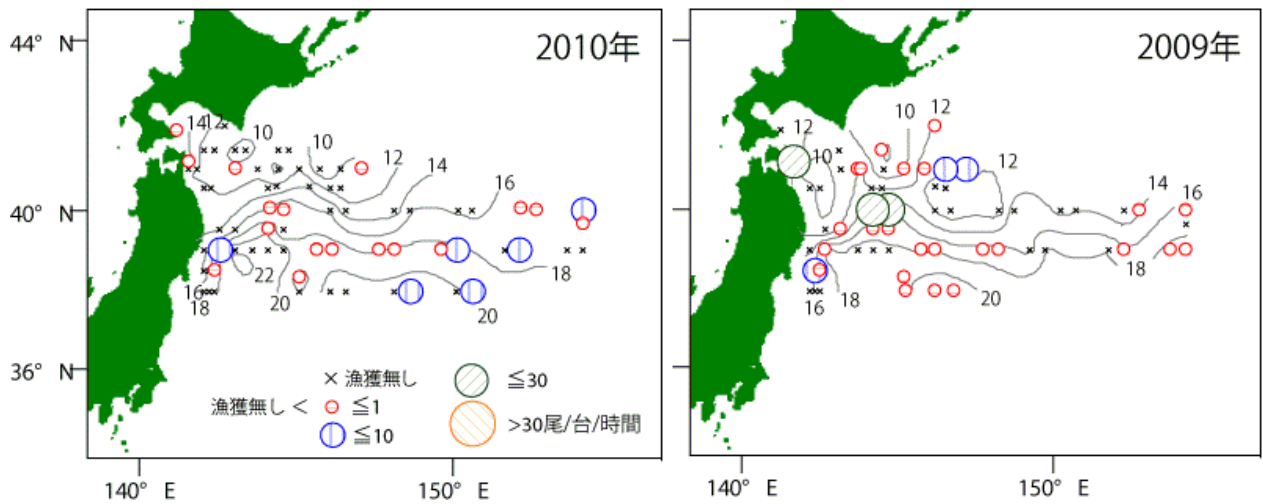


図3. 太平洋いか類漁場一斉調査の結果

2009、2010年に実施された第1次漁場一斉調査（6月上旬～7月上旬）におけるスルメイカのCPUE（釣り機1時間当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点、実線は等温線（海面水温）を示す。

2010年5月26日～6月5日 (28点)

2009年5月8日～5月26日 (49点)

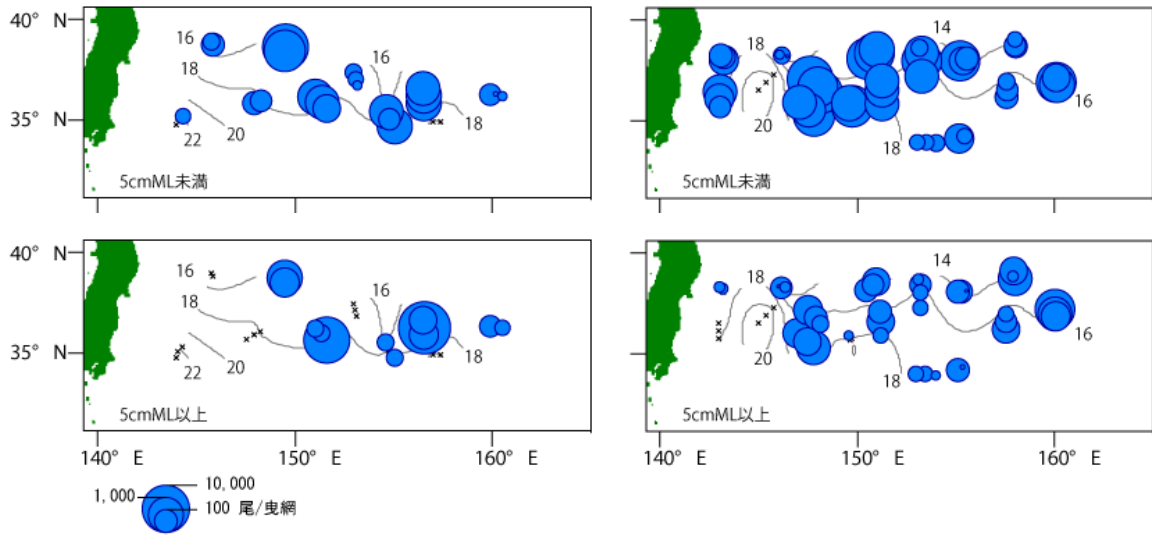


図4. 新規加入量調査の結果

2009、2010年に実施された新規加入量調査 (5月上旬～6月上旬) におけるスルメイカのCPUE (30分曳網当たり漁獲尾数) の分布。×は漁獲が無かった点、実線は等温線 (海面水温) を示す。

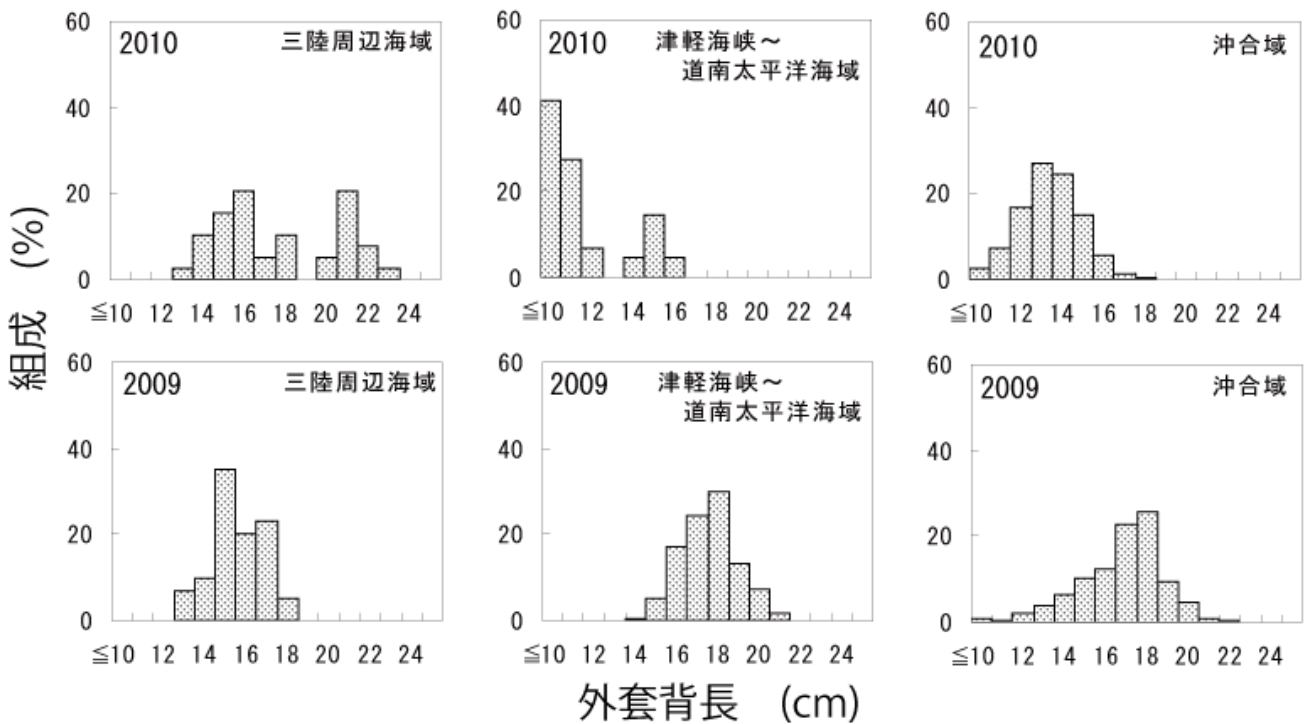


図5. 漁場一斉調査による外套背長組成

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	